

The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom, by Stephen D. Krashen
& Tracy D. Terrell, Oxford: Pergamon
Press & San Francisco: Alemany Press,
1983, vi+213 pp.

北 尾 謙 治

ここ数年心理言語学の分野，とくに第2言語や外国語の習得に関して最も注目されているのは，南カリフォルニア大学の Stephen D. Krashen である。彼は10年程前より，言語習得に関する数々の仮説を発表し，大きな波紋を投げつけて，言語教育界のチョムスキーとまで言われるようになった，それだけに彼の仮説を抜きにして言語教育論は語れないであろう。

1981年のデトロイトにおける第15回 TESOL 国際大会で Krashen の “Some Consequences of the Input Hypothesis” と題する講演を聞いたが，その仮説以外にも彼の提唱する重要な仮説のすべてが説明され，それを中心にして，言語習得論全体に及ぶものであった。当時，私は Krashen の研究内容には全く無知であったが，この講演には全体会なみの聴衆が集まり，彼の革命的な言語習得論に熱心に耳を傾けていたのは印象的であった。彼の仮説は単なるアイデアではなく，多くの研究を通し実証に基づいているだけに極めて説得力の強いものであった¹。以来，私は Krashen の研究に非常に興味を持ち始めたのである。

Krashen は1973年以降30編以上の論文を言語教育，言語学，心理言語学系の国内外の学術誌に掲載し，また単行本として発表している。主たる著作

としては、*Second Language Acquisition and Second Language Learning*² (1981年)がその最初のものである。本書において Krashen は「言語習得」と「言語学習」を明確に分けているが、これが彼の言語習得理論の基盤となっている。言語習得とは無意識のうちに言語が吸収されることであり、言語学習とは言語の規則（文法）を意識的に学ぶことである。人間は習得した言語により発話し、学習した言語の規則により、発話の直前か直後に間違いを正す。従って、言語使用は言語習得を基盤にしており、言語学習は表面的なかかわりしかもたない。流暢に話せるのは言語習得に依るのであって、言語学習に依るのではない。本書ではこのモニター・モデルの仮説を取り上げ、その仮説を実証する極めて興味ある研究成果を発表している。

第2の著書は *Language Two*³ (1982年)であろう。この書で Krashen は言語習得理論の全般を扱っている。完全な仮説でないが、前書より一層範囲を広げ、とくにエラー（発話における間違い）に関しては詳しく論じている。また、これを実証するための長期・短期にわたる実験が詳しく説明されていて興味深い。

第3の著書は *Principles and Practice in Second Language Acquisition*⁴ (1982年)で *Language Two* と同年に出版されているが、Krashen の理論展開からして、本書の方が後に書かれたと思われる。

本書では“Monitor Theory (言語習得理論)”を5つの仮説に基づいて広範囲に論じている。さらに種々の言語教授法をこれらの仮説により分析し、訳読や口頭教授法等の旧教授法より新教授法の方が言語習得に役立つことを立証している。

さて、これら3冊の著書をふまえて Krashen は Tracy Terrell と共同で *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom* (1983年)を出版した。5つの言語習得の仮説を論じ、それらがどのように言語教育に応用できるか詳しく説明しているが、Krashen の基本的な考えはおおよそ「前文」より理解できるであろう。これまで最も広く利用された口頭教授法

が成功をみなかったのは、それが文の構文に基づいた理論で、言語習得の理論に基づいていなかったからであり、また理論を応用した教授法の中には単なる理論（アイデア）の域を出ず実際の語学のクラスで実験され、実証されていないものが多かった。その点、Natural Approach (NA) は言語習得理論を基礎にして、その上に立って多くの言語が様々な状況のクラスにおいてどのように使用されたかを7年間に亘って実証研究されたものである。

著者はまず第1章で語学教育の歴史と従来使用されてきた言語教授法について述べている。過去の長い歴史において人々は実際のコミュニケーションの場を通じて言語を学習したが、著者はこれを「直接教授法」、または「伝統的な教授法」と呼ぶ。また、最近文法を基盤にした教授法が登場したが、言語習得や言語学習には構文や文法より、人々がどのように習得または学習するか、つまり明確な言語習得の理論に基づいた教授法が必要である。

最近伝統的な教授法が再発見され、Total Physical Response Approach (TPR)⁴ や Community Language Learning (CLL)⁵ のように1970年代の学習者を中心とした新教授法の中にも応用された。NA もこの伝統的な教授法の応用であるが、第2言語や外国語の習得の研究成果に基づいているだけに、新教授法の Silent Way や Suggestopaedia のように特殊な道具や施設も必要とせず、広範囲の教授法に適することが長所となっている。

NA の中心の考えは、まず言語習得は理解することにより行われるということである。聞いたり、読んだりして理解することにより言語習得が行われ、話すことによって行われない。また、言語習得は言語学習と明確に分けられる。大人も言語習得は可能であり、子供と同じ方法、すなわち、言語を自然なコミュニケーションの状況で使用して無意識にその知識や技能を身につけることができる。ただ大人は子供ほどうまく言語習得は行えない。他方、言語学習は意識的に規則を知り、文法の知識を持つことであるが、最近の研究では、コミュニケーションにおいては文法は以前考えられていたほど重要ではない。

言語を理解し話すためには学習より習得が大切である。学習は発話の時に間違いを正したり、高度な作文の技能として必要で、正しく訂正できるための条件は、(1)発話するまでに十分吟味する時間があること、(2)発話者がいつも正しい発話を意識していること、(3)発話者が文法を正しく知っていることである。もちろん、実際の会話はかなり速く話される上に、話者は何を話すかに気をとられ、いかに話すかにはあまり注意が払われないし、また文法の知識も限られているので、これら3つの条件が満たされることは極めて少ない。

言語習得は理解できる入力 (input) があってはじめて可能である。NA では初級クラスにおいては理解できる入力を与えることであり、クラス以外の入力が理解できるようになるのが目標である。NA は初級から中級レベルを対象とするもので、コミュニケーションのみでなく、文法の指導にも十分役立つことが実証されている。NA は部分的にも利用できるし、どのようなクラスにも適用しやすい。

この NA が基盤としているのは Krashen の言語習得に関する5つの仮説であり、第2章で詳しく論じられている。簡単に述べると、

- 1) 習得／学習の仮説：言語習得と学習は根本的に異っている。
- 2) 自然な順序の仮説：文型はある予測可能な順序により習得される傾向がある。これは大人も子供の場合もいえる。
- 3) モニターの仮説：発話は学習されたものではなく習得された言語の蓄積から行われる。学習されたモニターシステムは、習得されたシステムからの発話を訂正するが、発話することを抑制できない。
- 4) 入力の仮説：言語は既に習得されているものより少し上のレベルの入力を理解することによって習得される。まだ習得されていない文型も文脈や言語外の種々の要素から理解が可能である。
- 5) 情緒的フィルターの仮説：自信の欠如、低い自尊心や神経質、また教師と学習者、学習者同士の関係の乏しさ等の消極的な要素は言語習得を妨害

する。

第3章において、著者は NA が上記の5つの仮説と関連する原理とその原理の意味を論じている。

- 1) NA の目標はいかにコミュニケーションを行うかである。クラスを中心はコミュニケーションの内容であり、文法的事項ではない。
- 2) 発話は、発話する前に内容を理解していることが必要で、十分理解できる入力があれば発話は自然に行われるようになる。最初は学習者に何が話しかけられているかの理解を助けることから行われる。それ故、教師はいつも学習する言語を使用し、学習者に興味のある内容を中心とし、彼らに理解できる入力を与えることが必要である。
- 3) 会話は順を追ってなされるべきである。まず最初は言語を使用しなくても応答できるようにする。次に1語の応答、それから2～3語の応答、最後に完全な文による応答をさせるといった方法をとることである。文法の正確さは重要ではなく、コミュニケーションを妨げない程度の間違いは正されなくてもよい。間違いを正すことは学習の助けになっても、習得の助けにはならないからである。
- 4) クラスの活動は言語習得に必要な入力を与えることが中心である。しかし、モニターにより間違いを正すことも大切なので、学習のための練習も多少行い、教師の役目はそのバランスを保つことである。
- 5) 教師は学習者の言語習得の情緒的障害を取り除くよう努力する必要がある。それには、興味ある内容を取り上げ、学習者には神経質にならずにできる限り話させ、人間関係を含めて極力習得に適した環境づくりに気を配ることである。

著者はこの他にも言語習得に影響を与える要素について論じている。学習には適性が問題だが、習得にはむしろ態度が影響する。第2言語で習得したものにより理解できない場合は、第1言語の習得したものが理解のため使用されることがある。NA では反復練習は極力避けられるが、既に作成された

対話は習得の助けのため少し利用される。年齢も重要な要因で、年齢が高くなるほど情緒的障害が大きく、習得は困難となり、学習の要素を多くする必要がある。

第4章において著者は、さらに NA の詳しい内容の説明に入る。NA は4技能すべてを使用することによって、基本的な個人のコミュニケーション技能を発展させるためのものであるから、NA を使用する教師は学習者の学習目的をまず調査する必要がある。学期の終りには、学習者は文型や文法事項をどれだけ学習したかではなく、ある内容を話したり、種々の状況においてコミュニケーションが可能となることが期待されている。内容に関しては、自己紹介、自己の経験、さらには自己の意見表明等多種多様である。

初めて言語を習得しようと試みる者に対しては言語を使用しなくともできる活動、例えば TPR から始める。数時間の理解できる入力を与えられると、学習者がひとりで応答するようになる。最初は1語で、後には単語を組み合わせで応答する。各々の段階における質問の仕方や絵の使用法等、詳しい活動を説明している。またクラスの運営に関する提案を行い、学習者の応答の仕方、学習者のエラーの扱い方、読み書きの指導や発音指導にも触れている。原則として聴くことが入力であるが、読みも入力として認めている。発話のエラーには寛大であるが、正しい入力を与えることの必要性を強調しているのは興味深い。

NA は習得活動の連続で、それらが言語習得の基盤としての入力を用意する。NA を使用する場合は適当な内容の伝達と理解に中心があるべきである。教師は学習者の理解を助けるために、言語以外の視覚教材やジェスチャー等も使用する。内容としては身近かなものから取り上げ、学習者が容易に理解できるように努める。また、学習者が入力を理解できない場合はどのようにクラスで扱うか等も最初に教えておくのは有益である。そして教師は学習者が入力を理解しているかどうかチェックできる方法を知っていて、時々実施することも重要である。

第5章で提案されている活動は4種類で、(1)情緒的な人間的活動、(2)問題を解決する活動、(3)ゲーム、(4)内容に関する活動である。25ページにわたって多くのものが紹介されているが、必ずしも新しかったり、ユニークなものではなく、その使用法が少し異なるだけである。要は、習得の基盤となる入力を用意し、この入力をいかに学習者に理解させるかが大切なのである。

第6章で著者は読解と作文に関して論じているが、NAのこの分野における応用に関しては、多くの研究に基づく実証性がなく、少し説明に物足りなさを感じる。しかし、NAの目標はあくまでコミュニケーションの初級と中級レベルであるのでやむをえないであろう。

読解は入力になりうるので必要であるが、著者によれば、そのための目的と教材を考えるべきである。目的は精読、多読、その他に分かれる。よい教材の選定には語い、文法、意味が難しすぎないことが大切であるが、最も重要なのは学習者が興味をもって読めることである。

文法の指導に関しては、大人の学習者には必要があれば教えればよいとしている。学習であるのでテキスト等で独自に学習させるのがよく、クラスでは習得に関する活動を出来る限り多くするのがよい。

作文に関してはNAでは4つの目的がある。語いの復習、口頭活動の入力を導きだすための準備、発話におけるエラーの訂正（モニター）、そして、実践的な目的である。興味深いことは、理解できる入力として文法より語いの方が重要であることを指摘しており、フリーズの提唱したオーラルアプローチと対照的な点である。

第7章ではテストを扱っている。多くのテストは学習成果を評価し、習得したものをテストするのではない。習得したものを評価するテストの作成は困難である。教師はテストでもって何が評価されているかよく知る必要があり、例えば、聴き取りのテストでは、テープを聴く前に問題を与えないと記憶力の評価になると注意している。

以上、本書を読み通して、NAの原理が我国の英語教育の向上にいかを示

唆するところが多いか。成果の上がらない現状を批判されることによって、一層強く感じた次第である。

我が国の英語教育は語いと文法を中心にした言語学習であること。従って習得を目的としていないので、当然コミュニケーションはできないことになる。

中・高・大学の英語テキストを取り上げても、言語的・内容的にかなり問題がある。とくに大学レベルでは難しすぎて理解できない入力がされている場合が多い⁶。正しい音声による入力という点にいたっては皆無か非常に少ない。

中・高校のテキストの場合も、一応学習指導要領に基づいてはいるが、その文法事項が Krashen の提唱する予測できる習得のための自然な順序になっているかといわれれば、はなはだ疑問であろう。

クラスでは学習のみが行われ、いかに正確に文法や語いを学習するかが強調されるだけである。学習者に発表の機会をもっと多く提供し、自由にエラーをしながらモニターを行い、英語を習得するようにしむけることが必要であることは言うまでもない。

評価はほとんどの場合、いかにエラーが少ないかで行われているが、これも大きな疑問の一つである。

英語を通して何を教えるかが不明確で、多くの場合は英語そのものを教えるのが目的になっている。さらに情緒的な面にもっと考慮を払う必要がある。学習者の興味、年齢、必要性、及びクラス的环境等を考慮し、学習者の習得活動に障害を与えないようにする必要がある。

NA の示唆しているものは他にも沢山あろう。NA は特別の道具や施設もいらないし、どのようなクラスにも応用できるので、我が国の英語教育にも十分活用できるはずである。

本書はこの NA の原理とクラスへの応用を明確に説明し、現在行き詰っている語学教育の解決に大きな糸口を与えるものである。Fries が *Teaching*

& *Learning English as a Foreign Language*⁷ (1945年) でオーラル・アプローチを提唱し、語学教育界に一大革命を起したのと同様の影響力を与えるものと思える。

注

- 1 北尾謙治「最近の TESOL の動向」『HEMISPHERE: New Ideas in Language Teaching』2号アジアサジニストロジー研究所・名古屋外国語専門学校 1981年春 30-31ページ。
- 2 Stephen D. Krashen, *Second Language Acquisition and Second Language Learning*, Oxford: Pergamon Press, 1981, pp. vii+151.
- 3 Heidi Dulay, Marina Burt and Stephen Krashen, *Language Two*, New York: Oxford University Press, 1981, pp. xvii+315.
- 4 Stephen D. Krashen, *Principles and Practice in Second Language Acquisition*, Oxford: Pergamon Press, 1982, pp. ix+202.
- 5 TPR に関しては以下を参照されたい。
北尾謙治「Learning Another Language Through Actions: The Complete Teacher's Guidebook by James J. Asher」『同志社大学英語英文学研究』24号 同志社大学人文学会 1980年3月 87-95ページ。
- 6 CLL に関しては以下のものを参照されたい。
Charles A. Curran, *Counseling-Learning in Second Languages*, Apple River, Illinois: Apple River Press, 1976, pp. v+ 133.
北尾謙治「Counseling-Learning/Community Language Learning Model の英語教育への応用」『現代英語教育』第16巻第9号 1979年12月 28-32ページ。
- 7 Kenji & S. Kathleen Kitao, "College Textbooks Do Not Meet Needs," *The Daily Yomiuri*, (September 16, 1982), p. 7.
Kenji Kitao, "Common Missconceptions About 'Reading English,'" *The Daily Yomiuri* (February 17, 1983), p. 7.
- 8 Charles C. Fries, *Teaching & Learning English as a Foreign Language*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 1945.